

トーマス・ヘップバーンと 18 世紀オークニー諸島

古家 弘幸 (徳島文理大学)

I はじめに

本報告の目的は、18 世紀オークニー諸島の啓蒙思想家、トーマス・ヘップバーン (Thomas Hepburn, 1727?-77) の『オークニー諸島の貧困』(Hepburn [1760] 1885 [以下、Letter と略記]) を題材に、スコットランド教会穏健派経済思想の多様な問題関心に光を当てることである。

リチャード・シャーは『スコットランド啓蒙における教会と大学』において、スコットランド啓蒙は 18 世紀後半の経済成長に対して、大きく分けて三種類の反応を示したと論じた (Sher 1985, 187)。

第一は、経済発展を積極的、意識的に擁護しようとしたいわゆる「改良」のイデオロギーである。進取の氣勢に富む地主階層による農業改良などを後押しし、生産性向上を積極的に推奨する立場である。

第二は、デイヴィッド・ヒュームやアダム・スミスのようにこれを描写し分析した「ポリティカル・エコノミー」の立場である。基本的には経済発展を是認するものの、より客観的な立場からその悪影響も含めて観察し評価しようとした。

第三は、シャーが提示したスコットランド教会穏健派に見られるように、徳や宗教、社会全体に対する経済成長の有害な影響を明らかにし対処しようとする立場である。「改良」による経済発展の結果広がった自己中心的で物欲的な、腐敗した価値観、派閥抗争、過剰な奢侈、疎外など、道徳的、社会的派生効果に関心を持った (Sher 1985, 187-8)。

本報告では、シャーの議論を踏まえて、ヘップバーンを取り上げながら穏健派経済思想を再検討することを課題とする。ヘップバーンは『オークニー諸島の貧困』(1757 年執筆、1760 年出版) で、イングランドとのユニオン体制下で富裕になっていくスコットランド本土とは対照的に、オークニー諸島が貧困に取り残されている様子を、現場での直接的な体験から活写している。

穏健派の経済思想では、富裕化する社会の中の「貧困」の描写など、より多様な問題関心が存在した。以下では、在野の思想史にも視野を広げ、制度や伝統の地域的特性に着目することで、スコットランド啓蒙の問題関心の拡がり的一端に光を当てたい。

II トーマス・ヘップバーンについて

ヘップバーンはイースト・ロジアン地方の借地農の長子として生まれた。エディンバラ大学で学んだ後、1751 年にモートン伯爵によってオークニー諸島の所領のバーセイ教区に聖職者推薦され、翌 1752 年に聖職受任した。

ヘップバーンがオークニー諸島へ赴任した当時、スコットランドでは長老教会が国教としての地位をすでに確立し、1750 年代には「穏健派」(Moderates) が勢力を拡大した (Allan 2002, 63-5)。文明化におけるキリスト教の積極的な役割を強調し、既存の宗教的、社会的、政治的構造に従いつつ、啓蒙の価値観の多くを擁護し、説教などを通じて普及しようとした。その教義は保守的ではあるが、啓蒙の原則と多くの部分で重なっていた (Sher 1985, 63-4; 89; 211; 328)。また穏健派は、1712 年に成立した「任命法」(the law of patronage) を厳格に適用し、聖職者推薦の権限を、パトロンであった貴族やジェントリー階層に集中させることに努めた (Sher 1985, 44; 50)。教会内の牧師の同格性と、牧師を任命する総会への従属を原則とする長老教会組織を重視し、教会の秩序維持と公共善のためには毎年開催される総会の決定に最終的な権威を認め、それに対する厳格な従順が必要との立場を取った (Sher 1985, 50; 52-3)。ヘップバーンの聖職受任も、このような手続きによって穏健派主導で行われた。

ヘップバーンが聖職者推薦されたバーセイ (Birsay) は、元は教会領だったが、16 世紀にオークニー伯爵領に入り、17 世紀には先代のモートン伯爵の所領となった (Clouston 1927, 142-3)。ヘップバーンは在職中にバーセイ教会を改修し、牧師館 (manse) を新築した

(Sinclair 1793, vol.14, 321-2)。

ヘップバーンは1752年から71年まで遠方のオークニー諸島に赴任していたものの、その経歴は穏健派の全盛時に重なるだけでなく、彼自身が穏健派の多数と同様にエディンバラ大学出身であり、晩年には生まれ故郷のアセルスタンフォードで聖職に就いたことから、アセルスタンフォードの前任者のジョン・ヒュームなどを通じて穏健派と接触を保ち、行動を共にしていたものと考えられる。ジョン・ヒュームはエディンバラ大学で学んだあと、アセルスタンフォードで1747年に聖職受任した。『ダグラス』(1757年)などの劇作家として有名になり、首相になった第三代ビュート伯爵の秘書も務めた (Sher 1985, 13; 33; 74-92)。

ヘップバーンのようにオークニー諸島に赴任した長老教会の牧師は、総じて穏健派寄りであり、18世紀末までには教区内で大きな影響力を得た。多くの牧師が生涯を通して一つの教区で任務を果たし、カルヴァン主義などの教義や共和主義などの政治思想には拘泥せず、ヘップバーンの『オークニー諸島の貧困』からもうかがわれる通り、農業改良や生活向上など教区民の現実的な経済問題に関心を寄せた (Thomson 1989, 77)。

パトロンだったモートン伯爵が死去した後、ヘップバーンは出生地のアセルスタンフォードへ牧師として移り、1777年に死去した。

III 『オークニー諸島の貧困』とスコットランド啓蒙

ヘップバーンの『オークニー諸島の貧困』は1757年に執筆され、1760年に印刷・公刊された。1885年にエディンバラで再版され、その復刻版が2002年に発行されている。

ヘップバーンはオークニー諸島の貧困を、「気候、土壌、位置、農業における改良の欠如、製造業と水産業の軽視、破壊的で違法な交易、奢侈、法律の効力を巧みにかいくぐって行われる圧制、そして最後に派閥抗争」の九つの原因に帰している (Letter, 13/訳 (1), 83)。オークニー諸島を貧困に陥れている責任を一貫して当地の在地地主層 (laird) に帰せつつ論じている点が、『オークニー諸島の貧困』の最大の特徴である。

1. 「農業における改良の欠如」

ヘップバーンは、オークニー諸島の大部分の地主には、農業の隆盛をもたらしているイングランドの地主階級に見られる慈愛が完全に欠けていると述べる。在地地主は、貨幣地代の代わりに現物地代、短期の借地契約や借地契約更新料、非常に多くの際限のない奉公、数々の辛苦を小作農に押し付け、改良への熱意を押しつぶし、農業は発展せず、住民の生計が貧しくなってしまう (Letter, 16/訳 (1), 85)。

オークニー諸島では農地の大部分が、旧来の土地配分法 (run-rig system) の下にあった。土地がばらばらの細長い小区画に分割され、複数の借地農に共同で貸借されていたため、個々の創意工夫が「改良」に活かされにくく、生産性が低かった (Thomson 2003, 94)。

対照的に18世紀のスコットランド本土では、ヘップバーンの出身地であるローランドを中心に、市場経済化の波に乗って農業の改良が進んだ。地主階層は土地を権力や軍事力の源泉としてではなく、利潤を生む資産と捉えるようになり、農業改良の推進に利益を見出した (Devine 2005, 17-8)。かつての共同作業での農業から、借地農同士の競争原理が働き個人の創意工夫が活かされるようになり、農業部門の市場経済化が進んだ。世紀後半には囲い込みが進み、道路が整備され、単独で農地を経営する借地農が「改良家」の理想となっていた (Divine 2005, 76; 80)。

ヘップバーンが赴任していた頃のオークニー諸島は、ローランドより少なくとも半世紀は農地改良への試みが遅れていた。イングランドの地主階級とオークニー諸島の在地地主層を対照させたヘップバーンは、ユニオン体制の恩恵が遠方のオークニー諸島にはまだ及んでいないと見ていた。

2. 「製造業と水産業の軽視」

当時のオークニー諸島で営まれていた製造業は、亜麻糸の紡績業であった。ジャコバイ

トの反乱鎮圧後、英国政府はさらなる反乱防止のため、ハイランドに投資することで貧困に対処しようと、1746年に英国リンネル会社 (British Linen Company) を設立した。オークニー諸島の上位土地所有者であったモートン伯爵はこの英国リンネル会社を通じて紡績業をオークニー諸島で興し、当地の安い賃金水準を活用してニューカッスルなどイングランド東岸やシェトランドに市場を開拓し、農業をしのぐほどの輸出産業に育てた (Thomson 1987, 214-5)。紡績業は在地地主層と商人層に多大の利潤をもたらしたが、ヘップバーンは多くのオークニー諸島の在地地主が、過度の耐え難い負担となるほどの紡績の業務を借地農に強要していた点を批判している (Letter, 21/訳 (1), 88)。オークニー諸島の製造業に関するヘップバーンの議論は、モートン伯爵による紡績業の導入をユニオン体制のオークニー諸島への恩恵として評価しつつ、紡績業を営む在地地主層による借地農や小作人の酷使、紡績業の乱用を批判する立場を取っている。

漁業に関しては、ヘップバーンはその経済的な有利さを高く評価していたが、オークニー諸島において最も軽視されている部門と見なしていた。オークニー諸島では在地地主層と借地農層の対立を始め、社会が極めて分裂しており、漁業など公共の利益となる立案を創立していくのに十分に必要な団結ができないため、英国における船乗りの最高の育成所のひとつとなり損ねているとヘップバーンは考えていた (Letter, 22/訳 (1), 89)。

3. 「破壊的で違法な交易」

ヘップバーンは社会の破滅のもととなる密輸、不法交易が、過去30年に渡ってオークニー諸島では急速に広がってきたと述べ、密輸が盛んになっている原因を在地地主層の指導力の欠如に求めている (Letter, 23/訳 (1), 89-90)。

18世紀のオークニー諸島では、農業が生存の最低限を提供する水準に止まっていた一方で、密輸を含めた交易は全般的に拡大した (Thomson 1987, 207)。しかし密輸は人々の精神を墮落させるだけでなく、不法に入手した奢侈品の消費で体力や気力をも奪うのであり、オークニー諸島の生来の病気である壊血病が昔よりも常習的になってしまったとヘップバーンは論じる。また住民が怠惰になり、多くの労働ができず、前世代ほど長生きでもない原因は、ひとえにこの密輸に帰せられるとヘップバーンは見ていた (Letter, 23-4/訳 (1), 90)。

4. 「奢侈」

ヘップバーンが奢侈をオークニー諸島の貧困の原因として挙げる理由は、それが住民の勤勉によって購入されているわけではないと考えていたからである。したがってオークニー諸島の奢侈は、交易が繁栄している場所よりも有害であるとヘップバーンは論じる (Letter, 24-5/訳 (1), 90-1)。実際に当時のオークニー諸島で奢侈を維持するために使われた最大の財源は、ケルプの生産であった。ケルプは貧困層に雇用を与えただけでなく、過去20年に渡って毎年英貨2,000ポンドの現金収入をオークニー諸島にもたらしたとヘップバーンは推定している (Letter, 26/訳 (1), 91-2)。

18世紀のケルプ生産は、濡れ手で粟とも言える高収益産業であり、原料の海藻が豊富なスコットランドのハイランド西部や諸島、特にヘブリディーズ諸島ではかつてないほどの富を地主層にもたらし、増大する人口を支えた。オークニー諸島ではケルプ生産が繁栄を極めた1770年代から1820年代までは「ケルプ時代」(Kelp Years)とも呼ばれ、この間にオークニー諸島の在地地主層は英貨100万ポンドを超える利潤を手にしたと見られている。他方で、低コストのケルプ生産は投資をほとんど必要としなかったため、農業とは異なり、その収益は「改良」に用いられることなく浪費された。こうして奢侈が広がり、オークニー諸島の在地地主層は支出を急増させた (Allan 2002, 96; Devine 2005, 86; 89; Shearer 1966, 38-9; Sinclair, vol.7, 455; 540-1; Thomson 1987, 207; 211-2; 228)。

ヘップバーンは当時のオークニー諸島の輸入と輸出を三対四と見積もり、輸出によってオークニー諸島の財貨が出て行き、引き換えに得られた貿易黒字が在地地主層による奢侈に浪費される結果、「この国は貧しいに違いない」という結論は避けられないと論じている

(Letter, 26-7/訳 (1), 92)。

しかし実際には、ヘップバーンが任地を離れた 1770 年代からオークニー諸島は「ケルプ時代」に入った。しかもケルプ生産が衰退したのと入れ替わるように、蓄積された資本を活用して 1830 年代には農業の「改良」が本格化した (Shearer 1966, 39-40)。結果的には奢侈がオークニー諸島を貧困化したわけではなかったと見ることもできる。

5. 「法律の効力を巧みにかいくぐって行われる圧制」

ヘップバーンがあらゆる国にとって貧困の一つの大きな原因と述べる暴政と圧制は、当時のオークニー諸島でも広範に行われており、ヘップバーンによる在地地主層批判の焦眉であると同時に、『オークニー諸島の貧困』の主要論点である。ヘップバーンがやり玉に挙げる圧制は、古来からの慣習や既得権、貢租から、また貪欲や残酷さ、その他の原因から発生し、法律の効力を巧みにかいくぐって行われる種類の圧制である。具体的には、短期の借地権、あらゆる種類の現物地代、新規借地契約料や借地契約更新料、不明瞭なまま際限なく強要される奉公などであり、これらは絶えず「改良」を妨げ、借地農を貧困と従属状態に貶めるとヘップバーンは批判する (Letter, 27-8/訳 (1), 92-3)。

ヘップバーンはモートン伯爵と一部の在地地主層との間で当時進行中であつたいわゆる「パンドラー訴訟」と呼ばれる法廷闘争を取り上げ、モートン伯爵側に立って在地地主層への批判を展開していく。この訴訟で原告の在地地主側は、伯爵領では永代租借地に対する毎年の地代支払いを決める衡量単位が原初の基準から五分の三以上も次第に増加されてきたと訴えた (Letter, 34/訳 (2), 86-7)。

「パンドラー訴訟」を原告側で主導したバーレイ島の在地地主であつたジェイムズ・ステュアート卿の所領では、軽装備の木製の鋤を用いるなど、施肥、耕作法ともに未発達であり、牧畜でも家畜が放し飼いにされ、豚が鼻で地面を掘ったあとに作物を植え付けるなどと皮肉られていた (Letter, 19-20/訳 (1), 87; Shearer 1966, 27-9)。島内に市場がなく現金収入が得られなかったため、大部分の地代は現物で徴収され、加えて借地農は領主から奉公を要求されるなど、生活水準は低かった (Shearer 1966, 29-30; Sinclair, vol.15, 301; 310)。農業収穫の上がらない島であつたことから、航海や交易が重要であり、遠洋漁業や英国海軍、ハドソン湾会社などへ人材を取られる結果にもなった (Shearer 1966, 40-2; Sinclair, vol.15, 311)。

またジェイムズ・ステュアート卿は、自身の所領の借地農や小作農に対する数々の圧制で悪名高い。所領内の住人の連れ去り、監禁、暴行、奉公の強要、伝統的に認められてきた泥炭の採取権に対する課徴金の導入、共同の放牧地の不法な囲い込み、借地農や小作農の住居への不法侵入、家畜や所持品・金銭の不法な押収、恣意的な科料、海岸に打ち上げられた難破貨物の占有などで責任を問われた (Fereday 1980, 38-40; Letter, 48/訳 (2), 95-6)。

在地地主層による圧制により、オークニー諸島では住民の勤勉さ、洞察力、団結力が欠如しており、農業、水産業、製造業を衰退から復興するのは、在地地主層が彼ら自身の利害を見極めてそれらを援助するよう尽力しない限り、ほとんど不可能であるとヘップバーンは述べている (Letter, 31/訳 (1), 95)。オークニー諸島の貧困は、在地地主層の圧制によって引き起こされてきたとヘップバーンは結論付ける (Letter, 44/訳 (2), 93)。

6. 「派閥抗争」

オークニー諸島の貧困の原因として最後にヘップバーンが取り上げるのが、派閥や党派の増大と拮抗りである。派閥抗争は富に対してだけでなく人々の精神に対しても悪影響を及ぼし続けているとヘップバーンは見る (Letter, 45/訳 (2), 94)。

ただしヘップバーンによる派閥抗争への批判は、ヒュームのように派閥一般への批判ではなく、「パンドラー訴訟」の原告側に加勢したオークニー諸島の在地地主層への批判である点が特徴である。ジェイムズ・ステュアート卿と彼の派閥は、モートン伯爵と彼の前任者たちを、オークニー諸島の基準衡量単位を桁外れの高さにまで折に触れて増加させてき

た暴君、圧制者だと申し立てた (Letter, 48-9/訳 (2), 96; Fereday 1980, 38; Thomson 1987, 231-2)。衡量単位に関する争いを、ユニオン体制下で拡張する新しい市場経済に相応しい英国統一の基準を導入することで解決しようとしたモートン伯爵の対処法は、何であれ変更は在地地主側の不利になるとの信条から、広い範囲で反発を呼び、監督教会とジャコバイト派に連なる在地地主層の伝統は、彼らをしてジェイムズ・ステュアート卿に好意を向けさせた。他方でモートン伯爵は、ユニオン以降に上院議会に入った16人のスコットランド貴族の一人としてコート派のホイッグに属し、末期のウォルポール政権側に立ちつつアーガイル公爵やその弟のアイレー卿側とも行動を共にし、長老教会派でハノーヴァー王家支持であったため、必然的に在地地主層の敵対的な態度を招いた (Fereday 1980, 4; 23; 47)。

ヘップバーンは反ジャコバイトの立場から、オークニー諸島の在地地主層による暴政と圧制は「権力を目的とする軍事的な貴族制」であり、モートン伯爵がその一員であったホイッグ支配体制のような「金銭と富を唯一の動機とする貴族制」よりも高貴で気高く、それだけ一層、下層階層に対する圧制はひどくなりがちであると批判する (Letter, 27/訳 (1), 92)。ヘップバーンによるポレミックな在地地主層批判、ホイッグ支配体制支持が、『オークニー諸島の貧困』に表れるほとんど唯一の明確なスタンスであるが、そのポレミックが時に強過ぎたことから、パトロンだったモートン伯爵は、『オークニー諸島の貧困』の出版に反対していたほどである。もしこの小著が出版されれば、訴訟の時と同じように泥仕合になり、自然に消えていったはずの憎悪を残し続けるだけにしかならず、訴訟で広められた偏見を取り除き、オークニー諸島の社会に調和を取り戻すことで平和と繁栄を実現したいとの著者の目的が達せられないと考えていたからである。伯爵の忠告により、ヘップバーンの小著は広範に配られることはなかった。表紙にはロンドンにて印刷と記されているものの、実際にはエディンバラで印刷されたと伯爵は推察している。ヘップバーンも伯爵の忠告を受け入れて、著者名と印刷者名を出さずに少数のみを発行したようである (The Earl of Morton: Document)。

ジャコバイト派として捕らえられたジェイムズ・ステュアート卿は、裁判で反逆罪が確定されることなく、1746年にロンドンのサザークの拘留所で病死し、弟のアレクサンダーもカロードンで戦死したが、バーレイ島の所領は縁戚関係にあったギャロウェイ伯爵に相続された。ギャロウェイ伯爵は、ジェイムズ・ステュアート卿の後を受けて反モートン派の在地地主層の先頭に立ち、「パンドラー訴訟」を原告側で引き継いだ (Fereday 1980, 125)。

『オークニー諸島の貧困』の結びでヘップバーンは、「パンドラー訴訟」や法廷外での派閥抗争が長引いている結果、オークニー諸島の社会が分断され、モートン伯爵によって着手された亜麻糸の紡績業など、いくつかの貴重な「改良」が未完成のまま放置され、貧困からの脱却が困難になっていると懸念を表明している (Letter, 56-7/訳 (2), 102)。ヘップバーンの議論は『オークニー諸島の貧困』の全体を通じて、モートン伯爵による所領経営で生活水準が向上したことをオークニー諸島へのユニオン体制の恩恵として評価しつつ、農業や製造業の軽視、密輸や奢侈、圧制や派閥抗争など、在地地主層側の所業を貧困の原因として批判する立場で一貫していた。

IV おわりに

スコットランド教会穏健派の経済思想は、「改良」の先進地エディンバラ近辺を拠点とした中心的メンバーに関しては、シャーが論じた通り、イングランドとのユニオン体制下で拡大した市場経済がもたらした負の側面への関心で占められていたと言える。しかし同じ穏健派の内部でも、エディンバラから遠く離れた離島にいたヘップバーンのように、「改良」のイデオロギーの言語を用いた分だけヒュームやスミスほど客観的とは言えないまでも、富裕化する社会の中の「貧困」を「ポリティカル・エコノミー」に近いスタンスで描写した経済思想も存在した。

ヘップバーンの場合、在地地主層批判、モートン伯爵擁護というスタンスが、『オークニー諸島の貧困』の依拠するほとんど唯一の立ち位置であった。その結果、市場経済の拡張をイデオロギーや理論として支持するのではなく、特定の状況下での貧困問題の解決策と

して、富裕の増進の現実的方策として打ち出し、擁護する議論を貫くこととなった。そしてイングランドの地主階級とオークニー諸島の在地地主層を対照させた点などに表れているように、当時の新しいユニオン体制下における様々な利害対立と政治的抗争の中であえてユニオンを推し進める側に立った啓蒙の経済思想の特性を強く示すことにもなった。

この点は『オークニー諸島の貧困』の記述形式を継承している『スコットランド統計報告』(1791-99年)でも同様である。ジョン・シンクレア卿の呼びかけでスコットランド教会牧師による教区経済の記述を集めた『スコットランド統計報告』は、旧来の土地耕作法の廃止や共有地の分割・囲い込みなど、市場経済を活用した「改良」への方策が現場に即して実践的に論じられており、ヘップバーンの記述が一つの先駆的モデルとなっている。オークニー諸島の教区の記述が特に充実していることも、偶然ではない(Thomson 2003, 95)。スコットランド教会穏健派の経済思想は、シャーによる性格付けよりも多様な問題関心と全スコットランド的な拡がりを持っていたのである。

主要参考文献

- Hepburn, Thomas [1760] 1885. *A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country*. Edinburgh: William Brown. 古家弘幸訳「トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』(1760年)(1)」『経済学論究』(関西学院大学) 60(1): 77-97. 古家弘幸訳「トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』(1760年)(2)」『経済学論究』(関西学院大学) 60(2): 85-103.
- MacKenzie, James [1836] (1750), *The General Grievances and Oppression of the Isles of Orkney and Shetland*, Second Edition. Edinburgh: Laing and Forbes.
- The Earl of Morton: Document. Handwritten 'Manuscript Transcription of comments apparently by the Earl of Morton on the proposed publication of "A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country", c.1760. D1/375, Orkney Archives, Kirkwall.
- Pundlar Process: Earl of Galloway and Udallers of Orkney v Earl of Morton. Printed legal papers, 333Y, Orkney Library.
- Sinclair, Sir John 1793. *The Statistical Account of Scotland: Drawn up from the Communications of the Ministers of the Different Parishes*. Vols. 2, 7, 14 and 15. Edinburgh.
- Allan, David 2002. *Scotland in the Eighteenth Century: Union and Enlightenment*. London: Longman.
- Clouston, J. Storer. 1927. *The Orkney Parishes*. Kirkwall.
- Devine, Thomas M.; Lee, Clive H.; Peden, George C. (eds) 2005. *The Transformation of Scotland: The Economy since 1700*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fereday, R. P. 1980. *Orkney Feuds and the '45*. Kirkwall: Kirkwall Grammar School.
- Furuya, Hiroyuki 2003. The 'private vices, public benefits' controversy: the response of the Scottish Enlightenment to Bernard Mandeville. PhD Thesis, University of Edinburgh.
- 古家 弘幸 2007. 『人物で読む経済学史』ふくろう出版.
- 古家 弘幸 2008. 『物語 経済史』ふくろう出版.
- Murdoch, Alexander 1998. *British History, 1660-1832: National Identity and Local Culture*. London: Macmillan.
- Shearer, John W. 1966. South Ronaldsay and Burray: The Evolution of an Island Economy. Thesis presented for M. A. Honours Geography, University of Glasgow.
- Sher, Richard B. 1985. *Church and University in the Scottish Enlightenment: The Moderate Literati of Edinburgh*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Thomson, William P. L. 1987. *History of Orkney*. Edinburgh: The Mercat Press.
- Thomson, William P. L. 1989. The Eighteenth-Century Church in Orkney. In *Light in the North: St Magnus Cathedral through the Centuries*. Harry William MacPhail Cant and Howie N. Firth (eds). Kirkwall: The Orkney Press: 57-79.
- Thomson, William P. L. 2003. Agricultural Improvement. In *The Orkney Book*. Donald Omand (ed). Edinburgh: Birlinn: 92-101.